

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 26 日現在

機関番号：34431

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530898

研究課題名(和文)聴覚障害者の対人認知に関する基礎的研究—主題統覚検査の物語分析を通して

研究課題名(英文)A Foundational Study of the Person Perception Style of Person with Hearing Impairment on the Thematic Apperception Test: Through the Analysis of Their Narrative on the Thematic Apperception Test

研究代表者

栗村 昭子 (AWAMURA, Akiko)

関西福祉科学大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：60319803

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、聴覚障害者の対人認知様式を主題統覚検査(TAT)を用いて明らかにすることである。統制群は健聴大学生とした。両群の差は、物語の内容よりも物語の作成過程にあると考えられた。またTAT解釈は鈴木(1997)によったが、両群ともに鈴木の基準とは異なる物語が多く作られた。聴覚障害者は物語作成に、より多くの努力のいるものが目立った。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to evaluate the person perception style of persons with hearing impairment on the Thematic Apperception Test (TAT). Students with normal hearing were the control group of this study. It was hypothesized that the narrative building process other than the contents of the narrative itself might be the difference for both groups. The TAT interpretation of the current study depended on Suzuki (1997), but more narrative stories were reported than the standard Suzuki method for both groups of this study. Results of this study showed that more efforts were required by the persons with hearing impairment in a narrative building process.

研究分野：臨床心理学

キーワード：聴覚障害 TAT 対人認知 物語分析 健聴大学生

1. 研究開始当初の背景

(1)聴覚障害者(以下、聴障者)に対する心理的支援については、最近始まったといっても過言ではない。また現在のところ心理療法の領域では進展しつつあるが、心理アセスメント分野での研究はまだ十分にされてはいない。そこには聴覚障害の特徴であるコミュニケーションの問題が深く関係していると思われる。

(2)聴覚障害児教育において、幼少期より家庭の中で母親により厳しい口話教育が行われているが、これが母子関係を阻害し、対人能力に重大な影響を及ぼしているという指摘もある。

(3)TAT は投影法の中で対人関係を含んだより幅広い具体的なパーソナリティ特徴を見ることができるという利点を持つ。ロールシャッハテストに比べると日本での使用頻度はかなり低かったが、最近のナラティブ研究の流れを受けて、使用頻度・研究ともに増えつつある。加えてロールシャッハテストに比べて厳密な言語表現が必要でない、例えば多少単語の使い方など表現上の齟齬があっても物語の文脈から理解できるために、聴障者を対象とした研究には用いやすいという利点もある。

2. 研究の目的

(1)聴障者の対人認知認知の様式を主題統覚検査(TAT)を用いて明らかにする。またテストバッテリーとして描画テスト(S-HTP)を用いてより詳細に検討する。

(2)現在の聴覚障害児教育において母親による幼少期からの厳しい口話教育が母子関係を阻害し、対人能力に重大な影響を及ぼしているとの指摘があるが、それについて実証的なデータをを得ることを目的とする。

3. 研究の方法

(1)被検者：聴障群は自立して生活している25名(17歳から41歳、平均年齢30.1歳、

男性15名、女性10名)。教育歴は高等学校以上で、ほとんどのものが就労していた。統制群は健聴の4年制大学の学生34名(19歳から24歳、平均年齢21.6歳、男性10名、女性24名)。

(2)心理検査及び面接：聴障者群・心理検査(TAT、S-HTP)と半構造化面接(幼少時の家庭でのコミュニケーション手段や状況、幼少時教育についての情報収集)。健聴大学生群・心理テスト(TAT、S-HTP)のみ実施。

(3)調査場面の構造：聴障者群・一定の技術をもった手話通訳者と検査者の3名で上記心理検査と面接を実施。健聴大学生群・個別で心理検査を実施。両群ともに同意を得たうえで時間短縮のためにICレコーダーで記録した。またTATについては実施法、解釈ともに鈴木(1997)に従った

(4)倫理的配慮：関西福祉科学大学倫理委員会の承認を得たうえで調査研究を行った。

4. 研究成果

(1)自立して生活している聴障者にTATを実施した研究は、筆者が調べた範囲では本研究が初めてであった。その意味で聴障者のTAT研究の基礎資料が初めて得られたといえる。

(2)鈴木(1997)によればTATの各カードには、カードの特徴から期待される出現頻度の高い反応とそれよりは出現頻度が低く、いわば被検者特有の反応である独創的な反応とがあるとしている。そのうえで健常群等のデータを提示しているが、ここではそれを参考にしながら、今回の健聴大学生と聴障者のTAT特徴を比較検討した。得られたデータの一部をTable 1に示す。

まずカード1はTATへの導入カードでもあり最も物語が作りやすいものになっている。しかし題材がヴァイオリンであるために、聴覚障害を持つ被検者にとっては確認が必要となろう。前回、粟村(2011)は、施設の聴障者対象に調査時には、ほぼ抵抗なく反応が得られた。今回も聴障者の過半数の被検者が

Table1. カードに対する各群の反応頻度(%)

カード	反応カテゴリー	大学	大学	聴障	聴障
		男	女	男	女
1	ヴァイオリンの 認知あり	9 (90.0)	23 (95.8)	14 (93.3)	8 (80.0)
	悩んでいる	9 (90.0)	20 (83.3)	14 (93.3)	7 (70.0)
	悩んでいない		3 (12.5)		1 (10.0)
	ヴァイオリンの 認知なし	1 (10.0)	1 (4.2)	1 (6.7)	2 (20.0)
2	手前女性を 家族	6 (60.0)	12 (50.0)	5 (33.3)	3 (30.0)
	手前女性を 非家族	3 (30.0)	12 (50.0)	10 (66.7)	7 (70.0)
	関係が不明	1(10.0)			
4	男を女が止め ている	6 (60.0)	17 (70.8)	10 (66.7)	3 (30.0)
	弱い男を女が 保護		1 (4.2)	1 (6.7)	
	男への関与が 薄い	4 (40.0)	6 (25.0)	4 (26.7)	7 (70.0)

各群毎のN(%)

ヴァイオリンを認知し、そこに悩みや悲しみなどを認めることができていた。ただヴァイオリンの認知のなかった聴障者群女性2名は「本」、聴障者群男性1名は「ベルトなど遺品が積まれている」とした。またヴァイオリンを認知しながら「ろうの子供だからどうしたらよいかわからないでいる」と戸惑いとも思える物語を作った被検者もいた。今後さらなる検討が必要であると思われる。

次に2カードにおいて、前景の女性と後景の男女が異質であるために家族として見られることは少ないとされていたが、本研究では両群ともかなりの割合で「家族」とされた。またカード4では一組の男女の意思の不

一致を認めたくえでそれに意味づけして語られるとされる。しかしここでも両群ともに男女の心の機微をとらえられていないだろう反応が目立ち、中には二人の関係性が語られたとみなすべきか迷う反応も多く見られた。特に聴障者群女性の反応で男女の関係が希薄さが目立った。「女性に問い詰められて(男性が)困惑している」などといった反応も見られた。これらは感情生活や性についての未熟さが関係しているのかもしれない。

検査態度全体として、両群は物語の内容に大きな差がみられたというよりも、物語の作成過程に差があると考えられた。すなわち聴障者群は心理検査に慣れていないことも関係してか物語を作るのにかなりの努力が必要であるようで、作成に時間がかかるだけでなく、登場人物を関係づけること自体に困難さがみられたりした。日常生活で他者に何かを語ることは幼少期よりありふれて体験されることであろう。しかし健聴者の家庭に生まれた聴障者はごく幼い時より家庭で口話教育が熱心にされるために、時として母子関係を阻害することがあるとの指摘もある。ところで、今回幼少期のコミュニケーション環境に関するインタビューにおいて、その環境は多様であり検査結果との関係をみるには至らなかった。より多くの被検者を集める必要があるといえる。また、「物語を作る力」「物語を作る過程」について引き続き考察する必要があると考える。

(3)テストバッテリーとしてS-HTPも実施したが、両群共に三沢(2014)が「発達の停滞」と指摘したような描画の発達の未熟さが認められた。ただ聴障者にとって描画は文字としての意味合いもあるために健聴者と同じ解釈をすることに関してはさらなる考察を加える必要があるといえる。

<引用文献>

栗村昭子、聴覚障害者のTAT、総合福祉

科学研究、第 2 号、2011、59-66

鈴木睦夫、TAT の世界 物語分析の実
際、誠信書房、1997

三沢直子、S-HTP に表れた発達の停滞、誠
信書房、2014

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[学会発表] (計 2 件)

粟村昭子、聴覚障害者の S-HTP について
の一考察、日本教育心理学会第 56 回総会、
2014 年 11 月 8 日、「神戸国際会議場(兵
庫県神戸市)」

粟村昭子、聴覚障害者の TAT 2、日本ロ
ールシャッハ学会第 18 回大会、2014 年
11 月 30 日、「佛教大学紫野キャンパス(京
都府京都市)」

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

粟村 昭子 (AWAMURA Akiko)

関西福祉科学大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：6 0 3 1 9 8 0 3